センター通信

（第４６号）

責任編集：清水展　吳咏梅　　郵便番号：100081　Tel：8424893　　1995.5.15

ニュース

◇４月１７日午後：本学期第１回目の社会研究会が二階の師生活動室にて開催され、中根千枝先生の『タテ社会の人間関係』の内容をめぐって討論した。

◇４月１８日：第１１期生の入試口頭試問がセンターの307室と311室において行われた。国家教育委員会が規定した最低点数以上の得点をした合格者２３名がそれに参加した。合格通知は５月下旬に２０名の学生に出す予定である。

◇４月２６日午前：(株)ベネッセ（旧福武書店）寄贈図書の贈呈式が，そのことにご尽力頂いた中国綜合研究中心の高橋正毅弁護士をお招きして，二階の図書資料室で催された。

午後：第１回目の言語研究会、文化・文学研究会がそれぞれ開催され、本学期の研究活動の計画や方法について議論した。

◇４月２７日：国家専家局主催のメーデーを祝賀する歌舞鑑賞会が保利大厦の国際劇場で催され、センターの派遣教授５名がそれに参加し、中央楽団少年少女演唱組の演出を鑑賞した。

◇４月２９日：センター主催の春学期の遠足で，北京郊外の鐘乳洞（石花洞）および盧溝橋・苑平城の見学に出かけた。派遣教授とその家族が多数参加され，郊外の春を楽しんだ。厳安生主任と呉懐中さんが同行した。

◇４月３０日～５月３日：派遣教授およびその家族は、山東省の煙台・威海へのメーデー旅行に出かけた。宋金文講師が同行した。

◇５月８日：第２回社会研究会が開かれ，前回に引き続き『タテ社会の人間関係』を手掛かりとして中日の社会構造の比較について議論した。

◇５月９日：厳安生センター主任が，日本国際文化研究センターの招聘客員教授として１年間の研究を行うために，日本へ出発した。

◇５月１７日：文学・文化の第２回活動として「北京文学，民俗文化散歩」が催され，鼓楼・鐘楼・什刹海周辺散策，豆腐池胡同などを散策する予定です。

＜十周年記念活動の準備進行状況＞

◇３月１日の締め切り日までに、全国の各大学や研究機関からの分科会応募者は４５名に達した。審査委員会が彼らの論文レジュメを選考した後、第一次審査の通過者に対して，第二次審査のための論文提出を依頼する通知を４月１０日に出した。

◇「世界の中の日本学　と題する特別講演と「世界の日本学と中国の日本学　と題するパネル・ディスカション報告者の名簿がおおよそ決定した。１０名の中日およびその他の

国の学者に講演を依頼する予定である。

◎現在までに13の単位が，当センターの開催する「日本学研究機関の責任者円卓会議」に参加する意向を表明している

◎十周年記念ビデオの作成については一応の段取りがついた

◎シンポジウムに関する他の準備作業も平行して進行中である

烟台 - 威海へ：メーデー旅行の記

北川　透

今年のメーデー旅行は，烟台，威海をたずねることだった。4月28日 17時50分，混雑を極める北京駅を出発して，約18時間。夜行列車に揺られて烟台駅に着いたのは，翌29日の昼前だった。日本学研究センターからの参加者は岡野先生夫妻，二藤先生夫妻，古田先生，矢口先生，清水先生，飛田事務主任，中国側から宋金文講師，わたしと妻の11名である。それに中誼国際旅行社の賈さん，現地旅行社の王さんが付き添った。

この日の午後は，烟台市北西部に位置する観光地蓬莱閣の参観である。わたしたちは中国へ来て2ケ月ぶりに海を見た。さすが仙境伝説のあるところだけあって，崖上に立つ仏閣群から望む海岸線は，砂浜が長く続き風光明媚である。ちょうどこのあたり黄海と渤海を分かつところでもあり，また，数年に1回ぐらい蜃気楼があらわれるというので，土産物店ではいかにもいかがわしい合成写真が大はやりなのであった。

ここはいちおう道教の寺院だそうだが，僧侶がいるわけではない。しかし，次から次へと堂をめぐっていて，道教が現世利益的なおおらかな宗教だということに気づく。なぜなら，陳列されている仏像のユーモラスな顔や妖怪変化，八福神（日本では七福神）もいれば，雨や水を司る竜王も祭られており，さらに観世音菩薩のお告げで海の守護神となる媽祖伝説など，不老長寿の神仙術から，仏教，儒教，キリスト教や土俗信仰までも混在しているように見えるからだ。

4月30日は，烟台の隣の威海に行く。移動のバスの窓から眺めていて気づくのだが，烟台や威海の街並は，北京や内陸部の都市より明るく，豊かで，きれいである。特に威海は美しいが，ガイドの話によると，ここは花園都市というのがキャッチ・フレーズらしい。経済特区としての実力や活気が感じられる。港の近くの百貨店の前が人だかりしているので，何かと思ったら，野外ファッション・ショウをやっているのだった。

この日の主な旅程は，船で劉公島に渡り，甲午戦争博物館を見学することである。甲午戦争という呼称は，わたしたちにはなじみが薄いが，明治27年の日清戦争のことである。この海域で清国の北洋艦隊が敗れた。わたしたちは展示館を見て廻ったが，あまり，国際・国内情勢の説明もなく，清国海兵たちの英雄的な戦いぶりが一方的に描かれていて，これでは歴史についての誤認が生まれるのではないか，という気もしないわけではなかった。

日本におけるわたしたち自身も同じだが，歴史をどう伝えるかということは難しい。

烟台に帰ったこの日の夜は，濱海大酒店での海鮮料理に舌鼓を打ち，食事も会話もはずんだ。そして，翌5月1日は，午前中，博物館などを見学し，空路，北京に帰った。いろいろな意味で楽しい旅行で，秘話や後日譚はあるが，それは秘するのが花ということだろう。

北京市基督教会海淀会堂：十周年記念礼拝のこと

小泉　仰

２日間の雨模様が続き，昨日など朝６度昼16度になるという天気予報通りの寒さで，震え上がったが，今日は６時半に起床すると，それほど寒くない。外を見ると雲一つない青空である。パンと牛乳だけの朝食を済ませ，８:30 a.m.に定刻通り黄栄光さんとご主人の楊氏が戸を叩いてくれる。案内役を引き受けてくれたのである。早速一緒に教会へ向かう。黄色のタクシーで北京市基督教会海淀堂に至る。20分掛からない。白石橋路を北へ向かい，暫くして左へ海淀南大街を曲がり，海淀区人民政府の近くにある教会である。入り口に崇文門教会と同じような門があり，多くの人々が集まっている。門内へ入って主任牧師斉鉄英氏と握手する。会堂の中へ入ってビックリしたのは，すでに多くの教会員が座っていたことである。それも500名は入ると見られる席が一杯で，空いている席を探すのに大変苦労する。この外に副会堂が３ケ所あり，それらも一杯で，さらに溢れた人々が外に立っている。日本の教会と比較して，その出席者の数と活気とに圧倒される。福音書にキリストが説教したとき，多くの群衆が集まったと書かれているのは，このことかと改めて感銘を受ける。このことはこれまで中国人のうちのある人々が，心の深い寂寥を感じてきたことを示している。すでに礼拝前30分以上前に賛美歌が歌われている。礼拝前の賛美歌斉唱は，崇文門基督教会と同じ方式である。

漸く９:30分に礼拝が始まる。今日は海淀堂基督教会の復堂10周年感恩崇拝（礼拝）である。牧師の説明によると，この教会は1933年に建設され，この年から数えれば63年の歴史がある。しかし文化大革命によって教会活動は停止され，大革命が終わった後，この教会は1985年に復興したのである。それから10年が経過して，今日の盛会を迎えた。

北京市では，1944年代に基督教会が60ケ所以上あって活動していたが，文革時代に２ケ所を除いてすべて閉鎖されたという。教会再開後十数年を経た1993年には中国のキリスト者は27万人であったのが，1994年には37万人になり，１年間でなんと10万人増加したことになる。驚くべき基督教の浸透と発展である。この海淀区では現在30人以上の集会を持つ教会は，10ケ所以上あるという。この海淀会堂は1,000人の会衆を越えている。全く驚き入った次第である。全体として年配者が多いが，聖歌隊に所属している人には若い人々も多い。今日の会衆の中にはオーストラリア人数人，韓国人，日本人（私）も参加している。牧師はすでに教会堂が収容人員の限界を越えており，早晩新しい教会堂を建設しなければ

ならないと訴えている。その通りである。こんなに活気のある教会は今まで見たことがない。

礼拝の構成は会衆参加型礼拝形式を取っている。礼拝次第を見ると，21項目の式目がある内で，なんと13項目に会衆が参加するのである。その参加の形式はある時は若い青年男女団，ある時は老年輩の男女団，ある時は中年の男性団，また女性団が賛美歌を壇上で歌うというように，各層が参加できるようになっている。これも1,000人を越える出席者では牧師一人で司式できないから，こうした参加型をとっているのかもしれない。正式の礼拝時間は，9:30から11:45までであるから，2時間45分である。長いが，他方でこの教会の熱気に圧倒される思いがする。中国の教会は生まれたての教会である。つまり原始基督教の初代教会のようである。今日は大変素晴らしい経験をしたものである。